

# 流行性肝炎の所謂第二次流行における 新患者に就ての検討

岡山大学医学部第一内科教室（主任：山岡教授）

小坂淳夫  
瀬戸桂太郎  
長島秀夫  
岩原正雄

岡山県衛生部公衆衛生課

石田立夫

〔昭和34年4月3日受稿〕

## 緒言

一地域における流行性肝炎の流行は、初年度において終るものではなく、次年度、次々年度と遷延することが知られている<sup>1)</sup>。而して初年度の流行は、例えば発生月に就ても必ずしも一定しないが、次年度以後の場合は、岡山県の調査<sup>2)</sup>では可成り正確に5～8月に多発しており、前年度と異なる様相を示している。そこで次年度以後の流行即ちこれを一応第二次流行と仮称して、これらが初年度の夫れと異り特異性を持ちうるか如何か、流行地の集団検診を併用しつつ観察し、注目すべき結果をえたので報告する。

## 検索方法

初年度の流行が可成り遷延したと思われる時期に、流行地の一斉検診を実施し、患者の摘発は勿論、潜在性肝炎、不顕性感染例を夫々診定した後、潜在性肝炎には加療を命じたが、不顕性感染例は患者にその由を告げることなく放置し、所謂第二次流行時の新患者の発生状態を観察した。

検索の対象には岡山県赤磐郡熊山町、久米郡吉岡村、和気郡香登町の流行を選んだ。又第二次流行時の新患者の診定には特に慎重を期し、誤診を可及的に避ける様に努めた。

集団検診要領は著者等<sup>3)</sup>の方法に従った。即ち既往症、自覚症に就ての詳細な問診、理学的所見として Stenon 管開口部の発赤、腫脹、浮腫、吻開等の所見、肝腫及びその圧痛状態、脾触知乃至濁音界の

拡大等、諸検査所見として指爪根部微細小血管像の観察、血液像（単球增多—8%以上、類淋巴球乃至類形質細胞出現、比較的淋巴球增多—50%以上）、肝機能検査所見（尿 Urobilinogen 定性、血清膠質反応—塩化 cobalt, thymol 濁濁, cephalin-cholesterol 絮状, Gros 反応等、血清 bilirubin 量測定等）等の成績を総括して夫々診定した。この際不顕性感染例なる言葉で総括した群は肝障害なく（尿 Urobilinogen 弱陽性程度のみ在所見例は障害群には入れなかつたが）、脾腫（濁音界拡大を含め）なく、血液像乃至指爪根部微細小血管像が特異的であるもの、Stenon 管開口部に特異所見があるもの、乃至軽度の自覚症があるが発病例として躊躇した例を包含したものであるが、特に流行地において他の疾患例例えば泉熱、腺熱、leptospira 病等、及び肝障害を来す別の要因等に就ても慎重に検索し、流行性肝炎以外の要因と考えられる所見の際は躊躇することなく除外し、成績の確実さを期した。

## 検索成績及び考按

先づ赤磐郡熊山町の5部落、久米郡吉岡村の3部落の成績を纏めると第1表の如く、潜在性肝炎に就て特に加療をすすめた熊山町では、それよりの発病例は少いが、加療の余り行われなかつた吉岡村では、可成りの発病例を出している。更に注目すべきは不顕性感染例よりの発病率が、健康と診定された例よりの夫れに比し著しく高いことであつた。而もそれらの発病時期は、過労、暴飲暴食、睡眠不足等の後

第1表 集団検診後の新患者発生状態

区分	赤磐郡熊山町					久米郡吉岡村		
	石蓮寺	稗田	松木	河田原	釣井	藤原社宅	藤原部落	久木
○	1}	0}	1}	0}	0}	7/(60)	4/(14)	1/(1)
×	3}/(70)	1}/(127)	2}/(67)	7}/(53)	1}/(97)	6/(78)	1/(14)	1/(14)
新患	1/(57)	0/(151)	0/(65)	1/(75)	0/(76)	4/(192)	0/(36)	1/(23)
非検	0	1	1	2	1	10	0	1
計	5	2	4	10	2	27	5	4

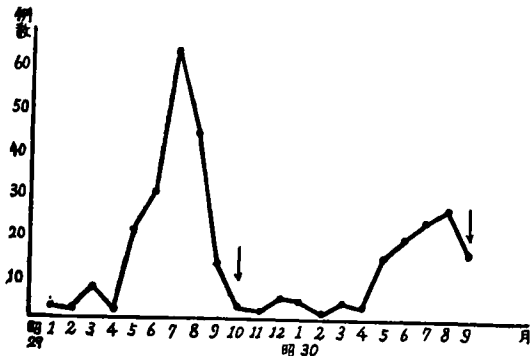
註. / ( ) 集団検診時に該当項例の総数を示し、各項の実数は患者数を示す。

○潜在性肝炎、×不顕性感染の略。

が殆んどで、時期的には5~9月に多くなっていた。このことから、第二次流行の新患者の主となるものは潜在性肝炎及び不顕性感染例よりの発病であつて、健康例が新しく感染して発病した真の新患者は意外に少いことが首肯される。即ち流行性肝炎では一度感染して肝障害を来し潜在性のままで進行するか、肝障害をも殆んど来すことなく不顕性のまま、謂わば仮面的に潜行した後、主として体力の低下を起し易い誘因の下に発病する場合が多いこととなる。

潜在性肝炎よりの発病については、既に A. L. Bloomfield, 4) 以来諸家の指摘しているところであるが、著者等の分類した所謂不顕性感染群よりの発病についての新事実は疫学上甚だ重大な事項であり、更に慎重に検討することとし、和気郡香登町の流行を選んだ。当町の流行は第1図の如く、初年度

第1図 香登町患者発生状態



と次年度の流行をみているが、初年度の流行の終る昭和29年10月9、10、11日に詳細な集団検診を行った後、第二次流行の終る翌年、昭和30年9月末日迄

の新患者発生状態を追及した。その結果は第2表の如くである。

第2表 香登町における第二次新患者発生状態

区分	項目	被検数	発病数	発病率
○		29	4	13.8%
×		813	84	10.3
健康例		477	10	2.1
非検例		710	18	2.5
計		2,230	116	5.2

備考. ○潜在性肝炎例 ×不顕性感染例

即ち潜在性肝炎例よりの発病率13.8%、不顕性感染例よりの発病率10.3%に比し、健康例よりの発病率は2.1%に過ぎなかつた。この成績は熊山町、吉岡村でえた成績と全く同一であつた。

処で昭和29年10月の集団検診時不顕性感染群に入れられた症例の主な所見は第3表の如くなり、軽度

第3表 不顕感染例と診定した所見

所見	例数	率
Stenon管開口部所見	131	16.1%
血液像	675	83.2
尿 Urobilinogen (+) 程度のみ	166	20.4
自覚症	306	37.6
血管像	37	4.6

の自覚症を有するものは37.6%に含まれていた。その自覚症の主なものは第4表の如くで、いずれも流行性肝炎時に屢々認められる症状であつた。そうだ

第4表 不顕性感染群に入れたものゝ  
自覚症

自覚症	例数	%
疲れ易い	128	15.8
全身倦怠	86	10.6
頭痛	135	16.7
心悸亢進	77	9.5
めまい	72	8.9
尿色濃厚	66	8.1
心窩部痛	65	8.0
腹部膨満感	58	7.2
食思不振	48	5.9
不眠	48	5.9
便秘	47	5.8
嘔気	24	2.9
嘔吐	14	1.7
不明の発熱	21	2.6
下腹痛	6	
下痢	4	
その他	3	

とすれば、不顕性感染群と総括した例の中、集団検診の際流行性肝炎とは診定しえなかつたけれども、軽微ではあるが顕性を示していたものが可成りの率に含まれていたこととなる。

而もそれらが一定期間の後、発病と明らかに診定しえられる病像を呈するに至つたものであるから、発病と診定された時期は寧ろ再発乃至再燃の時期と考えることが出来る。又不顕性感染例として記録したものの中、これら自覚症を持つた群と自覚症を持たなかつた群とで、発病する率を調査したが、第5表の如く特に差異を認めることは出来なかつた。そ

第5表 不顕性感染例中の発病

区分	症例	発症例	率
自覚症あるもの	306例	31例	10.1%
自覚症のないもの	507	53	10.5

こで多少の自覚症の有無は必ずしも爾後の発病には差して影響がないこととなる。一方自覚症を訴えなかつた例でも、夫々特有な生体反応を示しているのであるから、一度病原体 Virus が体内に侵入し生

体反応を起した場合は流行性肝炎では屢々発病を起し易く、これが第二次流行の源となり易いこととなる。これらの結論は多くの virus 性疾患でえた免疫と発病との概念に矛盾するかの印象を受ける。然しながら<sup>5)</sup>人の単純性疱疹ではその病原体は発病迄長い間一定の細胞中に無症状の儘潜んでいるし、麻疹、痘瘡も長い潜伏期を以て発病することが記載されているし、Brill 氏病でも病原体は人組織中に数年間潜むと考えられており、血清肝炎の virus の如きは長期間血中に潜んでいる例のあることも記載されているところから、流行性肝炎の病原体も亦長く個体に潜み、急に個体の抵抗の減弱と共に発病を起させる上記の群の virus と相似なものではないかと考えられる。事実著者らの1人小坂<sup>1)</sup>が流行性肝炎の潜伏期を調査した際、2~3ヶ月乃至半年という意外に長い期間のあることを指摘したことや、著者らが別に報告した<sup>6)</sup>如く本症に罹患後一見治癒した如く考えられた例で、1年乃至1年半後再発を繰返す例のあること等も、これらの性状を肯定出来る有力な事実ではないかと考えられる。

結 論

1. 流行性肝炎の所謂第二次流行時における新患者は、初年度の流行の際潜在性肝炎及び不顕性感染例として摘録された例よりの発病例が主であつた。
2. これら不顕性感染例として摘録された例には軽度の自覚症を訴え、後に軽症不全型ではなかつたかと考えられた例も可成り含まれたが、これら自覚症を訴えた例と、自覚症の全く認められなかつた例とでは、発病率は略々同率であつた。
3. 従つて流行性肝炎では病原体が人体に侵入後軽度の生体反応を示しながら多少の自覚症を示すか、或は全く無症状のまま長く経過した後、体力の低下と共に急に顕性に変ずる特性を有するものと考えられる。

(本論文の要旨は昭和31年4月日本伝染病学会総会席上にて発表した)

主 要 文 献

- 1) 小坂：日本伝染病学会誌，28巻，(昭29)，345。
- 2) 石田：日本公衆衛生雑誌，3巻，(昭31)7号，
- 3) 小坂他：岡山医学会誌，66巻(昭29)2363。

別刷1(昭31)

- 4) Bloomfield, A. L. Amer. J. med. Sci. 195, (1939) 429  
 5) Burnet, F. M. : Principles of Animal Viro-
- logy, Acad. Press Inc., Publish., New York (1955)  
 6) 小坂他 : 岡山医学会誌, 掲載中.

---

## A Consideration on the New Patients Attacked By So Called Secondary Epidemic of Infectious Hepatitis

By

1st Internl Med. Dep., Okayama University Medical School  
(Director : K. Yamaoka)

Kiyowo Kosaka  
Keitaro Seto  
Hideo Nagashima  
Masao Iwahara

By

Public Health Dept., Sanitary Station of Okayama Prefecture  
Tatsuo Ishida

1. The new patients of so called secondary epidemy of infectaous hepatitis were chiefly those who had been listed as the patients of latent hepatitis or inapparent infection in the previous epidemy.

2. In fairly great number of cases in which the patients were listed as inapparent infection, patients complained trifling subjective symptoms and later they were suspected as of slight abortive form. In the cases of compaining subjective symptoms as well as in the cases of having no complaint, the percentage of onset was approximately the same.

In case of infectious hepatitis, it is considered that the germs may have same slight responsive effect upon the patient after infected, or sometimes may have no effect for considerably long time, but as the physical strength declines, the germs show their special quality of causing the apparent symptoms.

---